

「ドウシ・テ」

道志 手帖

Summer 2018 no.20



道志の民話 ② むじな和尚(一) 竹の本地区

ずうっと、昔の、ある日の夕方だな。ほうで、こお久保の大屋というのがあっただ。ほうして、大屋の玄関口いきてな、夕方だから、「今晚わ」つてゆったら、その、大屋の主人が出てきてね、玄関の戸をあげたら、坊さんが立つてる。ほうしたところが、坊さんが、「鎌倉の建長寺からきましたがあ、ぜひ、泊めていただきて」(中略)膳へね。いろいろなものを添えてね。

そのころは、鎌倉の建長寺から、位の高い坊さんがきただちゅうので、ご飯にいろいろなおかずを添えてな、お膳を出したところが、「わしは、壁へむかって食べる、習慣がついているから、膳を仕切り戸のところへ持つていつていただきたい」ちゅう。(中略)さて、これは、どうもなにか、食べる音がなあ、こう、くしゃあくしゃあくしゃあ、ちゅうが、「位のお高い坊さんだかね。食べ方がへんだ」と思ったけども、まあまあ、それはねえ。(中略)

とうとうね、おとりもちをして、一週間泊ちいまっただわ。ほうし、よいよい、朝起きてね、「長らく、とんだ、ごやかいになったから、お礼に、なにか、書いたものをあげたい」というでね。(中略)奥の間に寝かしたわけだから、奥の間へいつてね、一冊の本をみたところが、百人一首のね、右書き、左書き字の、凄い筆勢でなあ。(中略)「わしやあ、犬が嫌いだから、その、沿道のいい(衆)を、まあ犬をね、つなぐようにい、ふれを出してもらいたい」という。ときの、ほれえ、大屋だからね、部落、部落へ飛脚ちゅうだ。(中略) 三島へ出ただわ。東海道の三島へ。

ほうした、ほら、むこうから、大名行列がきた。そうして、大名行列が通るというで、近在の人たちがな、どけ座してまあ、頭をさげてね、通りすぎるまで待つていたところが、その、大名行列にい、一匹の猛犬がいてな。その坊さんへ、飛びかかって、食い殺しもやっただ。そうして、偉い出来事ができたというので、村人が、そこへ、よってみたら、それが、大きい狸だった。ほして、ほら、いま上野原のその大屋(久保の大屋)が、上野原へ引越したわけだわ。そうして、そのころへ、大屋の主人が、狸坊主のねえ、こりゃあ、貴い百人一首の本だちゅうので、保存しといた。

道 志 手 帖

Summer 2018 no.20

Contents



表紙写真

撮影:佐藤八重子(2018.5.7)

地上に降りてしまったムササビの赤ちゃん(詳細は10頁をご覧ください)。

What's
"Doshi-techo"?

「道志手帖」とは？

略して「ドウシテ」。「どうしてどんなところ？」という関心から生まれた、道志村地域おこし協力隊を中心とした有志による冊子です。村で生活していて気になったこと、おもしろいなおもったこと、発見や驚きを、年4回報告していきます。2016年度からは新しい書き手による誌面をお届けします。書き手は常時募集しています。どなたでもお気軽にお問い合わせください。



[特集]

水を求めて

—竹之本簡易水道ができるまで— …4

[連載]

道志の民話②むじな和尚(一) 仲井義晶 …2

どうしの山 山みちマップ⑧鳥ノ胸～道志の森キャンプ場 石川敬子 …8

ムササビ——地上に降りてしまった天使達 佐藤八重子 …10

協力隊だより⑨ …12

道志生きものの写真帖⑨ …15

野の幸山の幸⑤グミ …15

お仕事拝見⑨杉本由貴子さん 仲井義晶 …16

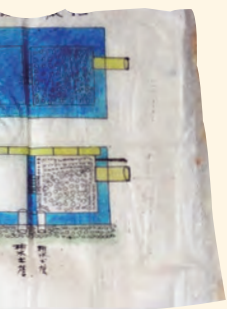
みなもと体験館イベント参加⑨磨くⅢ 佐藤八重子 …16

水を求めて

竹之本簡易水道ができるまで



竹之本地区、国道沿いのトンネルのなか。途中から入口を振り返ったところ。人が歩けるくらいの広さに整えられたごつごつした壁面からは、掘削の苦勞が偲ばれる



水に恵まれた村、道志。清流道志川の水は「赤道を越えても腐らない水」といわれ、古くから横浜市の水源として良質な飲用水を供給してきた。

一方、村内の暮らしのなかの水に目を向けると、水源地とはいえ、水は必ずしも容易に得られるものではなかった。村内の水事情は集落によって異なり、水利に恵まれた土地もあれば、昔から水に苦勞してきた土地もある。細長い村内を見渡せば、集落や個々の家ごとにさまざまな水事情があり、暮らしの水を確保するために重ねられた先人の苦勞は多様で計り知れない。

その一旦を垣間見させてくれるのが、竹之本地区の簡易水道の歴史だ。

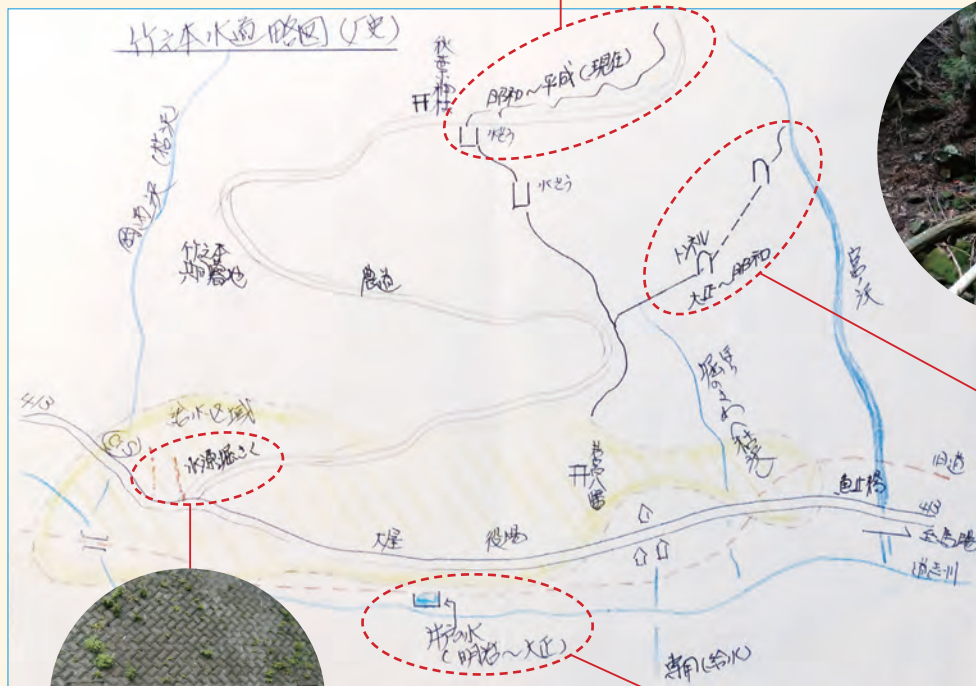
* * *

きっかけは、竹之本の国道沿いの斜面に二つ並んでいる、四角く切り取られた「穴」だ(②)。何かの入口のようにも見えるが、通り過がりに目に入っても、それが何なのか深く気に留めたことはなかった。しかし穴は理由もなく空いているのではなかった。なんと、かつて水脈を探して掘った、「トンネルの入口」であり、かなり奥まで続いているという。

ふだん日常的に目になっている場所に、まさ

4 移設後の簡易水道のルート

利用：昭和～平成（現在）



現在の簡易水道取水口付近の貯水タンク。農道終点から山を登り15分。

3 大正12年に掘ったトンネル

利用：大正～昭和

竹之本水道略図(歴史)

(山口俣徳さん作成)

2 国道沿いに残るトンネル(水源掘削)

掘削：明治～大正？

1 井戸の水

利用：明治～昭和
(今も利用できる)

*番号は古い順。本文中の番号と対応。



南都留郡道志村字竹之本飲用水改良工事縮図縦断面（大正12年の工事の資料）

かそのようなトンネルが口を開けていたとは。いつ誰がどこを目指して掘ったのだろうか。どんな苦労があったのだろうか。そして今、中はどうなっているのだろうか。

「子どもの頃に入って遊んだ」「入口が見えなくなるくらい奥まで続いていた」「農業用水を求めて掘ったトンネルだと聞いている」「結局、水脈は見つからなかった」「斜面が舗装される前はもつとたくさん穴が並び、穴蔵として使っていた」……。

さらに詳しい話が残っていないか竹之本で伺ったところ、もう一つ別のトンネルがあるという。それについては設計図や詳細な資料が竹之本の「大屋」に残っているという。

それが、大正12年に掘られた、竹之本簡易水道の始まりとなったトンネル(3)である。「大屋」の山口俣徳さんに、当時の簡易水道敷設工事にまつわる資料を見せて頂き、竹之本の水道の歴史について教えて頂いた。

竹之本地区は、古くから水を得るのに苦労する土地だった。周囲の山が高く、沢は竹之本地区をそれてよそへ流れていってしまう。明治から大正の頃までは、集落の一ヶ所に掘った「井戸」(1)と呼ばれるところから

トンネルのなかは……



国道沿いトンネルの中を探索。入るとひんやりと涼しい。左側の穴は短く、すぐに行き止まる。左右に部屋が伸び、穴蔵として利用されていた（写真左）。右側の穴は長く、入口付近に左右に部屋があるが、さらに奥まで伸びている（写真右：入口から奥を見る）。入口ははらばいで入る大きさ、途中はまっすぐ立てるくらいところも。生きものの気配は無い。下はぬかるむ粘土質の土、壁面は触ると崩れてくる。つき当たりにはビールの空き缶が（写真上：つき当たりから入口を振り返る）。

大正十二年 簡易水道契約書

竹之本簡易水道部

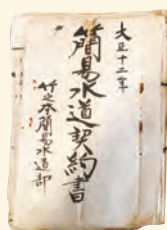
契約書

一 山梨県南都留郡道志村竹之本部落は従来水利に乏しく飲用水として僅かに井戸水を使用し居り一朝火災等の際しては救助し得へき者も見ながら手を空しくして島有に〇し実に慨歎に堪えざる次第なり今回申し合せ水利の便を計り簡易水道を敷設せんが為左の條項を契約締結す

第一條 簡易水道敷設に関し必要なる土地は末尾記載の連名所有土地何れの土地に係るとも無償にて提供すること但し末尾連名の家族所有地たり共本條に準ずる事

第二條

簡易水道敷設に関する費用は其総額を計算し左の等級及賦課率に依り之を負担する事
一等八名、二等三名、三等一名、四等四名
（※氏名省略）
賦課率
一等三戸二分、二等二戸四分、三等一戸六分、四等一戸



第三條

簡易水道工事に必要の工夫は末尾連名平等出役する事但し連名協議の上貧困者の工夫は軽減する事を得

第四條

簡易水道不成功連名解散の場合は其時迄の関係

水を汲んでいた。しかし、それだけでは火事があったときに十分な対応ができない。他の水源を探して何度かトンネルが掘られたが、水脈を見つけることは出来なかった(②)。

そこで、大正12年に集落の東に流れる宮の沢から取水する簡易水道の敷設が計画された。1年以上に及ぶ工事が行われたのち、無事完成した(③)。その後は、台風のたびに沢が荒れるので、沢の水の湧き出ている地中から取水するために水道管の移設工事が行われる(④)など、たびたび改良が繰り返され、今に至る。昭和40年代には、各戸から一人ずつ出たおこなった大規模な改修工事もあった。

大正12年の工事の契約書を読めば、山にトンネルを掘り水道管を通す大規模な工事で、工費総額2000円にのぼったこと、「不成功」の場合の費用負担についての取り決めが記されていることから、成功するかかわからない工事であったこと等、当時の工事の大変さが読み取れる。

現在、竹之本簡易水道は、利用者が加入する水道組合によつて自立的な維持管理がされている。修繕費として毎月の積立がなされ、水が不足したり不具合が生じたりすれば、組

費用は平等割を以て之を負担する事
第五條 簡易水道の成功を期する為左記の通り役員を設け工事関係の事を委任する事

- 一 委員長一名 一 副委員長一名
- 一 会計一名 一 副会計一名
- 一 書記一名 一 工事監督委員四名
- 一 委員若干名

第六條 委員長は工事に関する会議其他一切の事を監理するものとす

第七條 副委員長は委員長を補佐し委員長事故あるときは其代理となり工事の一切を監理するものとす
書記は委員長及副委員長と協議の上一切の書類を調製するものとす

会計は一切の費用収支を確実に取扱ふものとす
副会計は会計を補佐し会計事故あるときは代理をなすものとす

工事監督委員は工事の監督を嚴重にし且つ工事の進捗を計るものとす

委員は工事に関する会議に列席し一切の事を監督するものとす

第八條 役員会及総会は九名以上出席するに非されは決

契約書

一 南都留郡道志村字竹之本簡易水道敷設に付山口文次外 名を甲とし佐藤鷺之助乙とし左の契約を締結す

式千圓也 契約金高

一 工事施行ヶ所

道志村字入道沢山口高太郎所有地田通しより取入れ佐藤宇三郎佐藤芳房所有地境界より隧道口とし隧道を掘鑿し字竹之本平戸山口昌行所有地へ掘抜き字竹之本部落に至る

一 工事施行方法

山梨県技術員設計書の通り

但し材料(箱樋土管、セメント) 及支線を除く

一 工事施行期限

着手 大正十二年 月 日

竣工 大正十二年 月 日

一 金負受授の方法

定する事を得ず

第九條

此契約を脱退するものは其時迄の一切の費用を負担し脱退するものとす

第十條

専用給水栓は使用するときの外開放を禁ず
若し開放し置きたる者は一回に付金壹圓の料料金を徴収す

但料料金は修繕費として積立置くものとす

右契約を施行する為左に署名捺印する者なり

大正十二年二月二十一日

委員長

山口文次

副委員長

山口儀甫

会計

山口廣吉

副会計

佐藤市太郎

書記

山口一角

監督員

山口和 山口源次郎 山口傳蔵 佐藤才市郎

委員

山口高太郎 山口勝太郎 山口りき

佐藤守清 佐藤清蔵 乙顔辰

当役場に於ても右契約書中第十條の規定を遵守し修繕費をも負担可致候也

大正拾參年拾貳月拾九は道志 村長 佐藤悦蔵

着手 金千貳百円

中間 金參百円

竣工 金五百円

右之條件を以て請負契約致候に付ては後の為此契約書式通を作製し署名捺印の上逕通は甲者逕通は乙者に於て保管する者なり

大正拾貳年參月五日

道志村八千四百四拾番地

乙請負人 佐藤鷺之助

道志村 引受人 杉本新一郎

道志村 引受人 佐藤勝虎

道志村 引受人 杉本貢

道志村

甲山口文次外 名 総代人

山口文次 山口儀甫 山口廣吉

合の委員長が取水口まで様子を見に行き、落ち葉を取り除いたり、ときにはタンクに堆積した砂を掻き出したり、日常的にメンテナンスをおこなう。冬場など、どうしても沢の水量が少ない時は、節水を呼びかけてしのぐこともある。平成28年には、水道管を新しいものに取り替える工事をおこなった。修理や改良の努力が常に続けられている。

* * *

都会に暮らせば、水道は自治体が管理してくれるものであり、蛇口をひねれば水が出て来るのが当たり前だ。その水がどこから来るのか、想像することは難しい。しかし水は人が生きていくために最低限必要なもの。その水の管理を、どこか遠くに委ねて何の疑問を持たずに暮らすのはとても危ういことだ。

一方、村に暮らせば、自宅の水がどこからくるのか、全くわからない人はいないだろう。

道志村にも村が管理する水道はある。しかしそれとは別に、集落や家ごとに自主的につくられ維持管理されてきたたくさんの水道がある。それを用意してくれた先人の労に感謝するとともに、それが手放されずに今まで引き継がれていることが、かけがえのないことであると思う。水を自分たちで供給できるしくみが、これからも維持されていってほしい。



鳥ノ胸山～道志

道の駅
(中山バス停)

0:30 ↑ ↓ 0:30

林道終点

1:00 ↑ ↓ 1:20

鳥ノ胸山

0:45 ↑ ↓ 0:40

雑木ノ頭

1:30 ↑ ↓ 1:10

道志の森キャンプ場

0:40 ↑ ↓ 0:35

道の駅

※ 時間は目安です。

鳥ノ胸山の詳細地図はNo.13に掲載してありますが治山工事のため林道終点と登山道が変更になっています。山頂からは正面に富士山が見えて道志村が箱庭のように見える。とても展望の良いピークですがどこから登っても急なので注意しましょう!

道志の森キャンプ場

テントサイトが狭いので迷いやすい
真中の道を素直に行くこと

道志の森キャンプ場の約2kmにわたってキャンプ場として夏場登山の人は登りは東へ登り、下りは西へ下ります。下りは必ずおにぎり道を進みテントサイトへの道に入ります。



作・画 K-CO

2018.6



菰釣山



※ 道志村がイブツ
登山コースのFに準じます





表紙のストーリー

ムササビ

地上に降りてしまった天使達
母なる森に抱かれて

その日は午後からまとまった雨が降るとの予報だった。空を見上げると雲が厚く覆っていた。

突然「ギイーン……ドン！ドン！」と大音響がした。

外に出てみると、道路をはさんだ向かいの家の庭の杉の大木を伐採していた。20mを超える大木であったが、根元の方から腐り始めていたらしい。

木の伐採は終わり、今にも雨が降り始めようとする時、近所の方から「変わった動物がいるよ。見に行つてごらん。」とお声がかかった。

その場所はさきほど伐採された木の近くだった。2mほどの木の枝に何やら2匹の同じ顔をした動物が何とかし

がみついていた。時々、ふらふらと何やらおぼつかない。

無垢の愛くるしい瞳が印象的だった。可愛らしい顔はリスのようだが、胴体に何やらひらひらしているものが見える。しっぽを除くと体長は20cmあるかないか。とても神秘的な生き物を見ていると思った矢先、なんと2匹のうちの1匹が木から下りて私の方へ向かってくる、後ずさりしてもついてもくる。その足取りはおぼつかない。

とつさに、このような生きものに人は近づくべきでないと判断、離れた。一緒にいた夫が「ムササビだ！」っと。そういえばあの「ひらひら」は空を飛ぶ証。

でも、ともかく警戒しない。人を初めて見たからだろうか。むしろ、「キュルル、キュルル。」と高音の鳴き声で何か助けを求めているようだ。「お母さん！お母さん！」とも呼んでいるようでもあった。ともかく、まともに歩けない幼いムササビを放つてはおけない。瞬時に移動出来なければ、あつという間にほかの動物に捕獲される可能性もある。ムササビであれば野生動物。慎重な行動が必要だ。後で知った事だが、準絶滅危惧種。自治体によつては絶滅危惧種と指定されている。

そんなムササビがまさか道路をはさんだ家の庭の大木に巣を作つて子育てしていたとは、想像さえしていなかった。

た。都心部から車で2時間ほどの距離ながら、さながら秘境のような一面もある道志村に魅せられ移住してきたが、本当に神秘はあつた。

道志村役場、みなもと体験館のスタッフの方、猫の保護活動をしている友人と、その友人の親しい獣医師の方達に相談した。結果、野生動物の保護をしている「山梨県鳥獣センター」にまず相談の電話をという事になったが、あいにくの休館日。道志村役場の方が富士・東部林務環境事務所の鳥獣担当の方に相談後、「道志村役場で今回特別許可するので、今日1日捕獲して保護してください。」と電話が入った。良かった！助けられる！

その間、4 mほどの木に天使達は移動していた。魚釣り用のタモ網を用意、念の為に皮の手袋をして夫が梯子で木に上る。ムササビ天使達2匹とも抵抗する事もなく、ほどなく用意していた猫用捕獲器に保護。その瞬間……「ザッザッ……」っと、すぐに服を濡らす雨が降り始めた。間にあった！

冷たい雨にあたり続けたら低体温症になって、本当に天使になっていたかもしれない。捕獲器をタオルで覆い、外が見えないようにした。こうすると車で猫を移動する時も落ち着くので同じ様にした。さきほどの鳴き声は聞こえない。2匹がまるで一体になったように寄り添っていた。

翌日、2匹とも変わらない様子。都留市にある富士・東部林務事務所に運び、無事バトンタッチ。動物担当の職員さんは、昼時に関わらずすぐに甲府にある「山梨県鳥獣センター」へと向かわれた。(以下センターに略称)

無事、到着したとの連絡。センター職員さんに直接電話して伺うと「自立出来るようになったら、森に返します。」との事。動物園に行くようになつたら嫌だと思っていたので、ほっとする。実は捕獲した夜、僅かの間、雨がやんだ瞬間ムササビ達の母親が子どもを呼んでいるらしい、すごく高い鳴き声を夫が聞いた。母親が来たんだから、

もとの場所に戻そうかと話している間にふたたび大雨が降り始めた。それから母親の声らしき鳴き声は途絶えてしまった。雨さえ降らなければ……運悪く伐採される木に巣がなければ……野生として道志村の森に抱かれ、育まれる命だった。土地は違ってもまた森に育まれる。

「自立出来るようになったら、元々巣のあった道志村に戻せませんか？」とセンターの方に伺ったが、すでに母親が縄張りとして、大人になったムササビを覚えていないので適切ではないとの事だった。野生動物は巣立ったら、それぞれの縄張りが必要なのだ。

センターの方がいつでも会いに来てくださいとの事。3週間

後の5月27日、心待ちにしていた再会をした。その場所は想像していた外でなく、センターの建物内の事務室だった。清潔なタオルを敷いた小さい籠から顔を出してくれた。元気！ 元気！ 横にはゲージに入った20 cm位のテンの赤ちゃんもいた。ムササビ達は籠から出ようとす。天使のような顔は変わっていないが3週間で尻尾はふさふさ長

くなっていた。とても大切に、繊細に育てられていると直感した。

センターの方に話を伺うと驚きの連続だった。子どもではなく、やつと目の開き始めた赤ちゃんだった事！ 1日5回担当の方がミルクをあげ、排泄も促しているとの事。まだ2ヶ月はミルクのみ、との事などなど。離乳後飛べる高さの部屋に移すと本能的に飛び始めるといふ。ただ、こうなると夜行性になって、会いに行っても寝ており、姿を見れないかもしれない……。

なお、保護されたムササビの正式名称は「ワカヤマムササビ」といい、大人になってもせいぜい800g程度との事。通常ムササビといわれているの

はより大型の「ニッコウムササビ」との事。

ここで、お伺いした一般的なムササビの知識を記しておきたい。ムササビは通常1匹か2匹の子供を産み、木の高層の洞に巣を作り、雌はなんと1年近くも子どもと一緒にいて、丁寧に子育てをするという。雄は縄張り争いもあるが、雌の場合は受け入れやすいとの事。保護された2匹はなんと運良く2匹とも雌だった。飛べるようになって、仲間達と出会い、立派なお母さんになってほしい。

センターには動物園では会う事のなかった希少な野生動物達が保護されていた。特別な体験だった。無料で見学できる。昇仙峡まで8 kmという距離なので、昇仙峡に行かれる際には是非訪れてほしい。

地上に舞い降りた天使達は、山梨県には、ほとんどゆかりもなかった私ども夫婦の根をしっかりとこの地に下ろしてくれたような気持ちになった。また、山梨県に住む心優しい人達との出会いを多く与えてくれた。

ありがとう！ ムササビ天使達！母なる森のある道志村の自然がどうか永遠にあり続けますように。そしてまた、少しでもその為のお手伝いが出来ますように。

記 佐藤八重子



協力隊だより

19

このページでは、地域おこし協力隊の活動を報告していきます。

七瀧佳至



無農薬・無化学肥料・無動物
性肥料野菜の出荷組合「道
志自然農園」を立ち上げました。

道志で新規就農する移住者3人

で、ともに試行錯誤しながら、農
薬や肥料に頼らない野菜づくりに
挑戦しています。

現在50品目ほどの野菜を苗から

つくっています。収穫した野菜は
道の駅や、藤野の朝市などで販売
しています。

6/12 畑の虫とり



川原畑で4枚の畑をつくっています。虫がつきやすい葉ものの側には、虫がつきにくいレタスやマリーゴールドと一緒に植えています。しかし、それだけで防ぐことは難しく、毎日虫取りに追われています。巨大ひょうたんやパクチー、たけのこ型に結球するキャベツなど、さまざまな種類の野菜の栽培を試みています。昨年仕込んだ堆肥も順次使っています。無農薬の野菜は皮までまるごと安心して食べることができます。

6/4 採蜜



養蜂

@野原

採蜜の手順

- 1 ブラシでミツバチをやさしく払い落とします。



蜜刀で、巣の表面にフタをしている「蜜蓋」をこそげ落とします。

巣板にかぶせた布には「プロポリス」がついています。樹液とミツバチの唾液でつくられたもので、巣の中を清潔に保つための抗菌作用があります。



中のようす



遠心分離機に巣板を2枚ずつセットします。持ち運びできる、手動で回すタイプを使っています。勢いよく回しすぎると蜜の重さで巣が壊れてしまいます。今年つくったばかりの新しい巣は特に柔らかいので注意します。



片面が終わったら裏返して反対側も。

出て来た蜜を目の細かさが違う3重の網で漉します。巣に入っていた蛹や幼虫もこのとき除かれます。

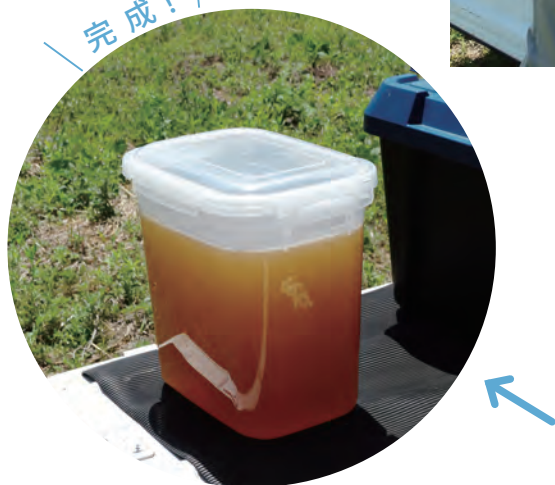
抱井昌史



5 月下旬から6月にかけては、採蜜の季節です。春先からミツバチたちが蓄えてくれた蜜を、巣から取らせてもらいます。

今年は15群で300キロほどの蜜を採ることができました。群れから女王蜂がいなくなってしまうことがあり、苦戦していましたが、採蜜が無事出来てほっとしています。クリの花が匂い始める前に全ての採蜜を終えました。

完成！



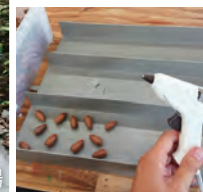
ミニ四駆のワークショップ開催



@みなもと体験館



@道志の森キャンプ場



5月26日、道志の森キャンプ場で開催の野外音楽フェス「ナチュラルハイ」で、ミニ四駆を組み立てて走らせるワークショップを実施。親子で楽しめて大好評で、用意した20個が半日で完売してしまいました。6月16・17日にはみなもと体験館でもイベントを開催。コースの一部には村内で挽いた木材を使用しています。木片を敷いて作ったでこぼこ道を、野外で走行可能な「ワイルドミニ四駆」を走らせて、楽しんでもらうことが出来ました。

鳥澤 拓太

サ ツマイモやジャガイモ、キクイモの植え付けが

終わり、これからトウモロコシや夏野菜の植え付けをしていきま



す。お芋はじゃがバター焼き芋として販売出来るように計画して栽培しています。

また、趣味を活かし、ミニ四駆を組み立て野外で走らせるワークショップをイベント等で実施したところ、大盛況でした。

6/5 トウモロコシの定植



@田代



6/15 わさびを収穫



田代のわさび田でわさびを収穫し、道の駅に出荷しました。台風などで苗が流されてしまうこともありましたが、植えてから1年半が経ち、立派な大きさに育ってくれました。



@戸渡



左上：ジャガイモ畑（男爵。大きいお芋が出来るよう一本だけ残して芽かきをしました）、右上：キクイモ（昨年の掘り残しが発芽して茂っています。昨年の3倍に畑を広げました）、左下：トウモロコシ（恵みゴールドを定植）、右下：サツマイモ（鳴戸金時と安納芋。焼き芋用にたくさんお芋が出来るよう、斜め植えです）。



庭にやってきた
タヌキ
室久保
2016年

チドリ

野原 2018年6月4日
30年程前から鉢植えで
育て毎年花を咲かせて
いる。本来険しい崖に
生える山野草。ランの
一種。



第9回

道志



生きもの写真帖

クマガイソウ

馬場 2018年5月12日
花の形を武士が背負う
「母衣」に見立て、アツ
モリソウとともに、熊谷
直実と平敦盛にあてて名
付けられた。絶滅危惧種。



野の幸 山の幸

第5回 グミ

庭にグミの木はありませんか？ 6月はグミの実が熟す季節です。
グミのある庭にお邪魔して、収穫をさせていただきました。
ジャムにすると色鮮やかで甘酸っぱく、渋みが残る、初夏の味です。



黄緑、オレンジ、赤の、さくらんぼのような大きさの実が、茂った濃い緑の葉の下に散りばめられています。樹齢50年以上経つというグミの大木は、刺のある枝を編み目のように張り巡らし、うっそうとした枝葉の下に入れば、プラネタリアムのよう。

脚立にのぼり手の届く範囲の鮮やかな赤い実を端から摘んでいく作業は、なんともいえない贅沢な気持ちにさせてくれるひとときです。二人がかりで2時間ほどでバケツに半分強の収穫。

そのまま食べると、思わずはき出してしまうほど渋いグミの実。果たしてジャムにしたところでおいしいのでしょうか。

一晩水につけ、茹でて、種や虫を漉し、砂糖をいれて煮詰めて完成。酸味のある匂いやもったりとした見た目はトマトソースのよう。渋みはどうしても残りますが、甘酸っぱさとその色のきれいで、許せる範囲でしょうか。種や虫を除く手間と、好みの分かれるだろう独特の味わいからは、グミジャムがあまり出回っていない理由がわかるような気がしました。

ともあれ、きれいなグミの実を無駄にせずおいしく頂くことが出来て安堵。ヨーグルトとトーストの朝食が楽しみになりそうです。

採集協力：佐藤太清さん

収穫日：6月9日

お仕事拝見 ⑨ につこりコールオペレーター 杉本 由貴子さん



作画 仲井義品

人との係わりが好きで5年前から勤務。
1日10～15人の利用者の方とテレビ電話
を通じてお話をさせていただいています。
ご相談やお悩み、ご質問などいろいろで
すが、人生の諸先輩から道志について、理
や助言をいただくこともあり私自身も会話
を楽しませていただいています。
これからもよろしく願い致します。ぜひ
あなたの声をお聞かせください。

みなもと体験館イベント参加 ドキドキワクワク体験コーナー ⑨

憧れのスローフード体験、木工体験。道志村に移住してきた私にとって、みなもと体験館でのイベントは毎回未知の事でいっぱい！ 私のドキドキ、ワクワクをこのコーナーで紹介します。

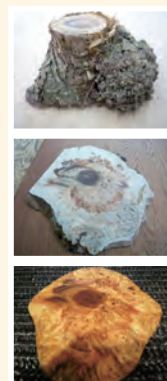
磨くⅢ

今回は「磨く」をテーマにしたものの作りのPartⅢ最終章。今まで無垢の樺、夜光貝を磨いた。今回は有り難い事に、みなもと体験館スタッフ個人所有の珍しい杉の瘤を提供していただき、磨く事になった。薪にする杉の中でたまたま見つけたという事で、探しに行ってもなかなかないという。調べてみると屋久島杉の瘤には途方もない値段のものもある。それが何故かは今回磨いてこそわかった。そうでなければ杉の瘤をたとえ見ても何も興味を抱かなかっただろう。瘤を板として切る所から見せていただいたが、大変固く磨くまでの形状にするまで大変な作業であった。木の皮はやすりのついた機械で削っていく。（*みなもと体験館には様々な木工の機械があり、自宅では出来ない作業でも、ここでは指導を受けて毎回楽しく出来る）その後は今までの磨くプロセスと同じように、荒いサンドペーパーから細かいサンドペーパーを使いひたすら磨く……杉の瘤の本領……秘めたる美しさが現れてくる。想像も出来なかった自然のなす芸術模様が少しずつ現れてくるのでドキドキ、胸躍る。

もう十分きれいに模様がでてきたと思い、スタッフの方に「これ位でいいでしょうか」と言うと、「どこまでかは、

自分の判断なのですよ～」とちょっと苦笑い。ウ～～～美意識への高さがどこまでかという事か……。実は「磨く」をテーマにしてから、時々思っていたのは「心を磨く」という事だった。磨く際、素材達は成形され荒削りから、徐々に細かく優しい削りにかけられる。心を磨くのも荒々しい体験にあたり、普段の地味な仕事や家事を丁寧に心を込めてしてこそ、心が磨かれ、それぞれの輝く人生になるのだろうか。そして人生は「心を磨く旅」であろうか。

道志村の薪として、数時間で燃えて灰になるだけだった杉の瘤から「火の鳥」（中央に目、左にくちばし、右上にとさか）が現れたように見える。これから共にいて、時に「心を磨く旅」を力づけてほしい。そうそう、磨いた後の最終工程は艶出し塗油として、エゴマ油を使用、光沢が出て一層美しくなった。年を重ねる事は実は「老いる」のではなく「オ・イ・ル」であり、人として一層輝くとき！（おあとがよろしいようで。チャン、チャン。） 佐藤八重子



道志村地域おこし協力隊

協力隊へのご意見や本誌のご感想をお聞かせください。
お気軽に左記の宛先へご連絡ください。